ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　7

ブーニン
パール・バック
シランペー

訳者　原　卓也
　　村岡花子
　　佐藤亮一
　　桑木　務
　　磯谷　孝
　　川崎竹一
　　家柳速雄

検査済
46.6.22
庶務課

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和46年5月5日　発　行
発行者／石　川　数　雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号　101
振　替　東京180番
電話　東京(03)294-1111(大代表)

印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社　1971　Printed in Japan
0397-522076-3062

編集顧問

川端康成

芹沢光治良

編集委員

高橋健二

佐藤亮一

白井浩司

山室　静

表紙装画

パブロ・ピカソ

装丁

原　弘

第6回日本翻訳出版文化賞受賞

ノーベル賞文学全集　全24巻　別巻1

1　シェンキェヴィッチ　キップリング　(訳)木村彰一　飯島淳秀
❷　ロマン・ロラン　イェンセン　(訳)宇佐見英治　山口三夫　河盛好蔵　竹内孝次
3　ポントピダン　ギェレルプ　シュピッテラー　(訳)林穣二　高橋健二他
❹　ハムスン　アナトール・フランス　レイモント　(訳)山室静　伊吹武彦　鈴木力衛　米川和夫他
5　デレッダ　ウンセット　S・ルイス　(訳)大久保昭男　稲富正彦　刈田元司
6　トーマス・マン　ゴールズワージ　(訳)浅井真男　佐藤晃一　渥美昭夫　⑩(71.7)
❼　ブーニン　パール・バック　シランペー　(訳)原卓也　村岡花子　佐藤亮一　桑木務
❽　マルタン・デュ・ガール　ピランデッロ　(訳)米川良夫　青柳瑞穂
❾　ヘルマン・ヘッセ　パウル・ハイゼ　(訳)高橋健二　小塩節
❿　アンドレ・ジッド　モーリヤック　(訳)若林真　片岡美智　堀口大学　白井浩司　井上究一郎
11　フォークナー　ラーゲルクヴィスト　(訳)速川浩　山口琢磨　⑨(71.6)
⓬　ヘミングウェイ　(訳)石一郎　高村勝治
13　ラックスネス　カミュ　アンドリッチ　(訳)山室静　山口琢磨　渡辺守章　鬼頭哲人　栗原成郎他
14　パステルナーク　ショーロホフ　アストゥリアス　(訳)工藤幸雄　工藤精一郎　鼓直
15　スタインベック　アグノン　(訳)大橋吉之輔　村岡崇光他
⓰　川端康成
17　ベケット　ソルジェニーツィン　(訳)安堂信也　水野忠夫他
18　ラーゲルレーヴ　メーテルリンク　ヒメネス　(訳)香川鉄蔵　川口篤　長南実他　⑪(71.8)
19　ビョルンソン　エチュガライ　ハウプトマン　ベナベンテ　(訳)毛利三弥　荒井正道　秋山英夫　会田由
20　イェイツ　ショー　オニール　(訳)高松雄一　福田恆存　倉橋健
21　モムゼン　オイケン　ベルグソン　(訳)長谷川博隆　氷上英広　松浪信三郎他
22　ラッセル　チャーチル　(訳)大竹勝　佐藤亮一
23　シュリィ・プリュドム　F・ミストラル　カルドゥッチ　タゴール　ヘイデンスタム　カールフェルト　(訳)川崎竹一　杉富士雄　河島英昭　福田陸太郎　田中三千夫
24　G・ミストラル　T・S・エリオット　クワジーモド　サン＝ジョン・ペルス　セフェリス　ネリー・ザックス　(訳)荒井正道　福田恆存　河島英昭　多田智満子　秋山健　生野幸吉
別巻　ノーベル賞物語

(注)…数字は巻数(白抜きは既刊)、○印の数字は予定刊行順序、(　　)内は刊行年月。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

ブーニン

選考経過…シェル・ストレムベリイ……磯谷　孝訳…6
授与演説…ペール・ハルストレーム……原　卓也訳…11
受賞演説……原　卓也訳…14
ミーチャの恋……原　卓也訳…17
エラーギン騎兵少尉の事件……原　卓也訳…55
人と作品…ジョージ・アダモヴィッチ……磯谷孝訳編…81
著作目録……磯谷　孝編…398

パール・バック

選考経過…シェル・ストレムベリイ……川崎竹一訳…100
授与演説…ペール・ハルストレーム……佐藤亮一訳…104
受賞演説……佐藤亮一訳…108
受賞記念講演 中国の小説……佐藤亮一訳…110

母の肖像……村岡花子訳…123

大津波……佐藤亮一訳…243

人と作品…ロバート・A・ウィギンス……川崎竹一訳…265
著作目録……佐藤亮一編…401

シランペー

選考経過…シェル・ストレムベリイ……桑木　務訳…284
授与演説…ペール・ハルストレーム……桑木　務訳…287

聖貧……桑木　務訳…291

人と作品…オロフ・エンケル……桑木　務
家柳速雄訳…387
著作目録……桑木　務編…404

肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、98、282
カラーさしえ／C・テレシコヴィッチ（ブーニンの作品）……32～33、64～65
フランソワーズ・アドネ（パール・バックの作品）……128～129、176～177、224～225
モーリス・フランツ・ボワントー（シランペーの作品）……304～305、336～337、368～369

イワン・アレクセーヴィチ・ブーニン

一九三三年受賞（六十三歳）

（ロシア　一八七〇～一九五三）

ミーチャの恋

エラーギン騎兵少尉の事件

Ivan Bunin

ブーニン

選考経過

授与演説

受賞演説

イワン・ブーニンに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官
シェル・ストレムベリイ

一九五八年までに、ロシア文学を代表してノーベル賞受賞者名簿に名を連ねていた作家、詩人といえば、イワン・ブーニンしかいなかった。厳密にいえば、その後も彼だけが名を留めることになる。一九五八年度の受賞者であるボリス・パステルナークが、周知のごとき困難な情況下でノーベル賞受賞を辞退してしまったからである。もしノーベル賞受賞を承諾してストックホルムに行くならば、永遠に国外へ立ち退くようにと当局から促され、そもそもその身辺さえ危くなったパステルナークは、それを辞退して、隠すべきもない幽囚同然の身でロシアに留まることを選んだ。

イワン・ブーニンがその年度に正式に推薦された三十人の候補者の中から幸運にも選び出されることになったのは、一九三三年のことである。彼が初めて候補に推されたのは、ちょうど十年前のことで、一九一五年度ノーベル賞受賞者のロマン・ロランによる。ロマン・ロランは同時にマクシム・ゴーリキーの名も推薦した。以後、毎年のようにきまって両者の名前が、あるときはいっしょに、あるときはそのどちらかというようにスウェーデン・アカデミーに上申されることになった。

確かにゴーリキーは、トルストイの死後、最も有名で、世界的に認められたロシアの作家であった。彼については、すでに一九一八年にノーベル賞候補として、ノーベル賞選考委員会にくわしい報告がなされていたが、その報告の内容は、彼にとってすこぶる不利なものであった。「もしゴーリキーの名が十年か十五年前にあがっていたならば、候補者としての正式推薦も十分に考えられたかもしれない。しかし、今ではもう不可能である」と、アカデミー会員ではないが、諮問を受けた専門家がこう結論している。「どっちつかずの人間」ということでゴーリキーを信用しなかったこの専門家は、具体的に表面にあらわれたゴーリキーの政治活動、ことにソ連の文化面でのそれに対しても疑惑をいだいた。それに、ゴーリキーの文学的インスピレーションも、とっくに涸れつくしてしまったように思われた。要するに、ゴーリキー推薦は退けられることが必至になり、そのとおりに事が運んだのである。

十年後の一九二八年に別の専門家が招かれたが、彼は、先任者のきびしい判定にそのままサインしてしまう気はなかった。コペンハーゲン大学のロシア語・ロシア文学科教授をしていたアントン・カルルグレン氏は、ゴーリキーが一九一七年のボリシェヴィキ革命以後に発表した作品、ことにその自伝をぬかりなく調べ、この作家の才能がみごとによみがえったことを率直に確認している。確かにゴーリキーは、新政権をその発足当初から支持してきた。またカプリ島――ゴーリキーは四半世紀ほども前からここが気に入って住んでいた――とレニングラードあるいはモスクワとの間を行き来しながら、議論の余地ある政府の文化政策に奉仕するために、献身的に自己の才能をささげたのであった。だが、全ロシアの新しい支配者となったスターリンがそのひいきの詩人たちに、「人間の魂の技師」となれ、と要求していたにもかかわらず、ゴーリキーには忠実にそれに従うことができなかった。彼はずっと以前から非常に個人主義的であり、故郷を失った「百姓」の崇拝に殉じようとする気持ちがあまりに強すぎたように思われる。この「百姓」というのは、遠い田舎からはるばるやってきて、大都会のプロレタリアートにまぎれこんだ永遠の放浪者であり、その苦労のにじみ出た人世哲学や感傷、哀感というものが暗い背景の上に浮かび上がって、ゴーリキーに最初の世界的な成功というものをもたらしたのであった。ゴーリキーが第一級の文豪であり、宣伝の目的に利用する

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のに格好な存在であることにやっとソヴィエト当局が気がついたのは、彼が還暦を迎えた一九三〇年ごろであった。そこでゴーリキーを表向きは立派だが、いわば監禁のようなかたちで一生モスクワにひきとめておくために、万全の処置がとられた。

晩年、ゴーリキーは、政府の官邸にまるでソヴィエト文学の法王みたいになっておさまったり、独裁者のような権限をもつ文化問題の最高顧問に任ぜられたりして、ありとあらゆる公の栄誉を受けることになったが、ノーベル賞受賞者選考委員会のメンバーたちは、このことにすっかり考えさせられてしまった。ここで改めて注意しておくほうが適当と思うが、委員たちは常に、あまりに政治的な片寄り、いわんや他国の内政干渉のような印象を与えるようなノーベル賞授与はさけようという、当然であり、立派な意図によって動いてきた。上記の参考人が述べた好意的な意見、あるいは、一九一八年に初めて彼の推薦がなされて以来（しかもそれはあるアカデミー会員によるものであった）、アカデミーの多くの会員たちが示してきた同情にもかかわらず、この原則は、ゴーリキーの場合にも守られることになった。要するに、ゴーリキーの候補者としての推薦は退けられ、別の言葉でいえば、無期限に延期されることになったのである。もっとも、それ相当の理由があってトルストイとドストエフスキーの後継者たちの中で最も才能があり、独創的とみなされたこの偉大なロシア人作家の信奉者たちは、彼が一九三六年に死ぬまで、同じ主張を繰り返している。

さて、これまでノーベル賞受賞の栄誉に浴したことのない偉大な文学に対してそれ相当の敬意を表したいと思いながらも、スターリン時代に輩出したロシアの作家というものをほとんどといっていいほど知らないスウェーデン・アカデミーの会員たちは、亡命して創作活動に専念しているロシアの作家に注意を向けなければならなくなった。一人は、西ヨーロッパの批評界によってチェーホフの好敵手とみなされていたイワン・ブーニン、いま一人は、ドミトリー・メレジコフスキー[1]だったが、メレジコフスキーはブーニンと同時に推挙され、ほぼ同じ人物たちによって支持されたのだった。小説家でエッセイストのメレジコフスキーは、ブーニンの名がスラヴ通だけが集まるせまいサークル以外で聞かれるようになるずっと以前に、スウェーデンを初めとする西欧諸国で翻訳され、知名度が高くて有利だった。他方ブーニンのほうは、諸外国の大学にいるスラブ研究者の支持ばかりでなく、財団の資金寄付者の実の甥であるエマニュエル・ノーベル氏の支持があった。エマニュエル・ノーベル氏は、帝政が崩壊するまで、ロシアにおけるノーベルの諸施設の管理者であり、叔父の遺言の法定執行人であった。この有名な遺言については、別の相続人である一族の人たちによって、長いこと異議が申し立てられていた。この国際的財団の偉大な主宰者であるエマニュエル・ノーベル氏は、パリに住み、ロシア人亡命者の租界と常に密接な関係を持ちつづけていた。彼は、毎年ノーベル賞授与にあたってストックホルムで行なわれるすべての儀式に主賓として列席するのであった。おそらく、ブーニンは彼の愛読作家の一人であったのだろうが、自分は発言権をもたなかったので、文学に精通したロシア人やフランス人の友人の仲介で推挙したのである。

確かにブーニンの駆け出しのころの作品は、革命前のロシアではほとんど世間一般に認められなかったが、一九二〇年にフランスに定住するために進んで亡命したときには、詩と散文の両面で評価に値する——批評家に高く買われていたのである——作品の数々をものしていた。彼は最初パリに住み、のちに南フランスのグラスに移り住んだが、またパリにもどって、一九五三年に死んだ。『村』とか、『サンフランシスコから来た紳士』、『ミーチャの恋』とかいった彼の主要な作品が外国で知られるようになったのは、フランス語とフランスの慧眼な批評家たちのおかげである。『ミーチャの恋』はフランス語で書かれたものだが、彼の大部分の作品がそうであるように、ソヴィエト・ロシアでも出版され、読まれた。ちなみに、ソヴィエト批評界は常にブーニンを高く評価してきた。モスクワのある新聞小説作家が『ミーチャの恋』についてこう述べたことがある。「亡命者たちからみて、この作品をブーニンの最も重要な作品にしたものは、そこに流れている祖国愛

1 一八六五～一九四一。ロシアの詩人、小説家、批評家。人間の霊的活動の象徴としての芸術を主張し、ロシア象徴主義の推進者となった。代表作に歴史的、哲学的三部作『神々の死』『神々の復活』『反キリスト』がある。

である」と。プロレタリア文学の「摂政皇太子」（ときおりゴーリキーはこう呼ばれた）として君臨したゴーリキーですらも、第一回ソヴィエト作家大会に寄せた、革命前のロシア文学に関する報告の中で、鷹揚にも、このブーニンに批判的リアリズムの代表者として、チェーホフと並ぶか、それにつづくような位置を与えている。この「批判的リアリズム」というのは、確かにロシアの社会悪を告発しはしたが、それを是正するために何も提議しなかったもので、新しい進歩的体制のかかげる「積極的、建設的社会主義リアリズム」ならば、必ずそうしたであろう、という。

さて、もとへもどると、ノーベル賞委員会の諮問を受けた専門家（ゴーリキーに関して最終的な結論を起草した人と同じ）がブーニンに関して下した結論は次のとおりである。

「広く大衆に認められていようといまいと、第一級の現代作家としての彼の地位は確立されている。確かに、彼の才能には限界がある。人間あるいは人間の条件について普遍的な知識をもっていた前世紀の偉大なロシア作家と肩を並べるほどの文豪ではない。だが、それにもかかわらず、彼はロシア古典主義の正統な相続者であり、はなやかで豪奢な、というよりも、むしろ堅実で長つづきのする貢献によって、ロシア文学の遺産をより豊かなものにしている。彼の作品においては、ほかでもないロシア古典主義という大オーケストラによるグレゴリオ聖歌の大シンフォニーが、少々弱々しいかもしれないが、清澄で、非常に美しく感動的な和音で完成しているのである」

一九三三年の候補者の列には、またポール・ヴァレリーがのぼっているが、ブーニンとつばぜり合いを演じたのは、ホーマーの再来ともいうべきギリシアの詩人、コステス・パラマス[1]のようである。その年、『魅惑』の作者であるポール・ヴァレリーは、十八人ものフランス学士院会員や、フランスのすべての大学を代表する同数の文学史科の教授たちによって推薦された。ちょうど五年前にも示威運動があって、それが最後の抵抗を押し切って、アンリ・ベルグソンに賞をもたらしたのだったが、それに比すべきこの大デモンストレーションにスウェーデン・アカデミーは屈してしまうのではないかと人々は思ったかもしれない。しかし、ヴァレリーの場合には、そうはいかなかった。専門家が招かれ、非常に高級だが、一般の人にはかなり難解なある詩を解釈することを求められたが、彼らの下した結論はあいかわらず否定的であった。

候補者リストにはこのほか、レイモン・ポワンカレー大統領とモーリス・メーテルリンクによって推薦された老作家J・H・ロニー[2]（兄）と、今回がはじめての大学者、ジョゼフ・ベディエ[3]という二人のフランス人がのっていた。後者は、トリスタンとイゾルデの物語のみごとな翻訳――定訳となることを心から望みたい――で、自分が同時にすぐれた詩人であることを明らかにした。ベディエの名はシュック教授によってあげられたものだが、この教授は、中世文学史研究に新しい道を切り開いた大胆な先駆者であった。また、はじめて新興国イスラエルを代表するユダヤ詩人ハイム・ナハマン・ビアリーク[4]や、チェコ文壇の新星カレル・チャペック[5]の名も見られる。またスカンディナヴィア諸国を代表する候補者には、ノルウェー人のオーラフ・ドゥーン[6]、デンマーク人のヨハネス・V・イェンセン、フィンランド人のF・E・シランペーなどがいたが、最後の二人は、後にノーベル賞を受賞することになる。

イワン・ブーニンのノーベル賞受賞は、メレジコフスキーと同じように、ゴーリキーの雄弁で熱烈な支持者のいるスウェーデンをはじめとして、世界中ほとんどいたるところで意外な印象を与えはしたが、別に大した反響もあらわれなかった。論評の調子は、好意的な無関心というようなものだった。ムッソリーニに忠誠を誓うジャーナリズムは、ガブリエル・ダヌンチオのイタリアではなく、トルストイとドストエフスキーの国が名誉に浴することになるのならば、旧体制の病的で退廃的な詩人よりも、新しいロシアの、生命力に富んだ、ダイナミックな文学の代表者が受賞するほうが望ましい、という意見を率直に表明したのである。

ブーニンのノーベル賞受賞が、最も熱烈にそして理解をもって迎え

られたのは、この詩人の亡命先であったフランスにおいてである。『エホ・ド・パリ』、『ル・プティ・パリジャン』、『エントランシジャン』、『エクセルシオール』など、パリのほとんどの大雑誌がブーニンとその作品に賞賛の記事を発表している。彼の作品は、田舎に住み、西ヨーロッパの文化に染まり、古きロシアの魅力にとらわれていたもう一人の貴族であるツルゲーネフの作品に好んで比較されたが、彼の作品、ことに農民生活の飾りけない描写の中には、モーリス・ジェネヴォアとかアルフォンス・ドーデーなどといったフランスの郷土作家たちの傑作との類似性も認められる。ケー・ドルセー（フランス外務省）の機関誌である『ル・タン』は、スウェーデン・アカデミーに対して非常に好意的な言葉を述べている。すなわち、「スウェーデンの審査員たちが、ロシア文学に対してなされてきた不公平を是正し、すばらしい選択をしてくださったのは、実に喜ばしいことである」と。ブーニンの受賞を祝うためにパリのシャンゼリゼー劇場でロシア人租界の連中が催した大パーティーには、フランス文壇の面々が顔を見せ、アカデミー・フランセーズからも、タロー兄弟[7]（もしかしたら、そのうちの一人）が出席した。

ストックホルムにブーニンがおごそかにあらわれると、人々は深い感銘を受けたのだった。寝台車案内係の手違いから、夫妻はもう少しでスウェーデンへの旅の最後の一日を三等クペーにすわったまま送ることになるところだったが、二人のスウェーデン人がこの受賞者に敬意を表し、進んで自分たちの寝台を提供した。スウェーデンに到着すると、ブーニンはストックホルムに住むロシア人租界の代表者の出迎えを受けた。彼らはブーニンにパンと塩を銀の皿に盛って差し出したが、ロシアの田舎に残っているこの伝統的な歓迎のしかたは、彼を非常に感動させた。この終身亡命者は、グランドホテルの窓から、どこかなじみのあるような町のパノラマを見はるかすことができた。雪におおわれ、両側に古い宮殿の立ち並ぶ川は、彼が幸せな時代を送ったペテルブルグを想い起こさせたのである。新聞記者連を前にして、ブーニンは、祖国の新しい支配者たちがいかに彼の心のなかに恐怖の感情を呼び起こしているかを率直に述べた。さらに、いやしい政治制度に隷属させられてしまったソヴィエト文学に対する軽蔑の念も隠さなかった。もっとも、このソヴィエト文学については、自分でも人づてに聞いたぐらいで、十分に知っているわけではない、と述べている。文学にくわしく、スウェーデン駐在公使をしていたチャーミングな老婦人アレクサンドラ・コロンタイ夫人が急性の外交官病にかかり、同国人の一人が光栄に浴するというのに、その年のいろいろなノーベル賞祝賀会に出席しなかったのは、別に驚くにあたらない。ノーベル賞授与式が行なわれることになっていたコンサート・ホールの花で飾られた壇上は、ノーベル生誕百年を理由に全部スウェーデン国旗だけで飾ってしまった。飾りには、受賞者の出身国の国旗が飾られなければならない規則になっていたが、このおかげで儀典係長は、ブーニンを祝うために、帝政ロシアの三色旗か、鎌と槌で飾られた赤旗のどちらかを選択しなければならない羽目に陥らないですんだ。

一九三一年度ノーベル賞受賞者であるカールフェルトの死後、スウ

1 一八五九～一九四三。ギリシアの詩人。祖国を愛し、その美しさをたたえて、『祖国の歌』『女神アテネ賛歌』を著わす。後期には思考の世界へ進み、哲学的作品『ゆるぎなき生活』などを残す。

2 本名ジョゼフ・アンリ・ボエス（一八五六～一九四〇）。フランスの作家。共同の筆名（J・H・ロニー）を持つ弟との合作も多く、『ネル・ホーン』『ヴァミレ』などはその代表作。哲学者としても、多元論的宇宙論を説いた。

3 一八六四～一九三八。フランスの中世文学研究者、文献学者。ゆたかな文学観と批判精神をもって『トリスタン物語』『ロランの歌』などの現代訳に輝かしい業績を残した。

4 一八七三～一九三四。イスラエルの詩人。『まことに民は花だ』『殺戮の町で』『火の巻き物』など、その詩は愛国の精神に貫かれ、民族の復興を鼓吹するものが多い。現代ヘブライ語の復興にも力を尽くした。

5 一八九〇～一九三八。チェコスロヴァキアの作家。人類が自己の発明によって滅亡にさらされる、という思想を一生持ちつづけ、代表的戯曲『ロボット』、その他SF的小説を多く書いた。ほかに兄ヨゼフとの合作戯曲『虫の生活』などが著名。

6 一八七六～一九三九。ノルウェーの作家。個人と大衆、伝統と進歩をテーマとして、大河小説『ユーヴィクの人々』全六巻や、三部作『同胞』『ラグンヒルド』『晩年』などを著わす。

7 兄ジェローム（一八七四～一九三五）、弟ジャン（一八七七～一九五二）。フランスの作家。兄弟で協力して創作にあたる。戦争や革命を題材にしたルポルタージュ的作品が多い。代表作『高名な作家ディングリー』『十字架の陰で』など。二人ともアカデミー会員。

ェーデン・アカデミーの常任理事となったベール・ハルストレームは、ほかならぬフランス語でブーニンの作品の特徴を慎重な言葉を用いて指摘したのち、ブーニンその人について演説を行なった。このノーベル賞委員会のスポークスマンによると、ブーニンが有名になったのは、なによりもその長編小説『村』のおかげだが、この作品は、はげしい非難を巻き起こした。それにはそれ相当の理由があったのである。ブーニンはこの小説の中で、正統なスラヴ主義者がことさらに大事にしている思想、すなわち、ロシアの農民階級が生来気高さを備え、何物をもってしても打ち勝ちがたい力をもち、それによってスラヴ民族はいつか世界を征服するであろう、という夢想を攻撃したのであった。確かにブーニンは、青年時代のトルストイ的信条からはずっと離れてしまっていた。だが、しかし、「彼はロシアの地に対する愛というものを執拗に持ちつづけた。だれもこの大地を彼ほど魅惑的ないろどりをもって描いたものはいなかったのである。彼はさんざんいやしいことや不正行為を目にし、耐え忍んできたあとで、自分自身から身を守り、今一度息つぐことができるように、この洗練された風景画家の仕事に没頭してしまったような印象を与える」というのが弁士の結論であった。

おごそかなノーベル賞授与式にひきつづいて、祝賀会がその年に限ってグランド・ホテルの冬庭で行なわれたが、その席上ブーニンは、ロシア語のなまりが強いけれど正確なフランス語で感謝の辞を述べた。その中で彼は、「ノーベル賞が亡命者に与えられたのは、発足以来はじめてである」ことを指摘して、無国籍者の不安定な立場を強調することを怠らなかった。公平にも今回の栄誉を彼にもたらしてくれたスウェーデンのみならず、彼が「口では表現できないほど、感謝の気持ちを感じている」親切なフランスに対して、感動にみちた敬意を表したのち、彼は次のような結論で話を締めくくった。

「会場にお集まりくださった諸殿下ならびに紳士淑女諸君、確かに皆さまがたの中には、さまざまな政治的、哲学的、宗教的信念をもったかたがたがいらっしゃいますが、このように意見を異にするにもかかわらず、皆さんがたを一つに結びつけている何物かがあるのです。それは、精神の自由に対する尊敬の念、人類全体に共通な遺産であり、私たちの文明の根本的基礎をなす良心の自由に対する愛情の念にほかなりません」

（磯谷　孝訳）

イワン・アレクセーヴィチ・ブーニンに対するノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事
ペール・ハルストレーム

一九三三年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

イワン・ブーニン氏が歩んだ文学活動の経歴は明確で、大変すっきりしたものです。彼は、地主貴族出身で、ちょうどこの社会階級がロシアの文化を支配し、当時のヨーロッパで名誉ある地位を占めたロシア文学を創り出し、宿命的な政治運動を惹き起こすにいたった時代の文学的伝統の中で育ったのであります。「悔い改めた地主」――憤りと憐れみを心にあふれさせながら、農奴たちを賤しい身分に置いておくことに反対して立ち上がったこれらの人々を、次の世代はこう皮肉まじりに呼んでいますが、彼らは、もっと立派な名前で呼ばれてもよかったはずです。なぜなら、彼らこそ自分たちが惹き起こそうとしていた動乱に対して、程なく自己の繁栄という代償を支払わねばならぬことになっていたからであります。

若きブーニンの身のまわりに残されたものといえば、家の財産の残骸ばかりでした。彼が過去の時代と密接な交わりを感ずることができたのは、詩の世界にひたっている時でした。彼は愛国心とか未来への希望に満ちた世界よりも、むしろ、まったく活気を失ったイリュージョンの世界に住まっていたのです。だが、その彼も改革運動の影響から逃げることはできませんでした。学生の時、賤しきもの、貧しきものたちとの友愛を宣言したトルストイの訴えに、彼は深く感銘を覚えたのです。そうして彼はほかの人たちと同じように自分の手で糊口の資を得ることを学びました。彼は、桶屋の職業を選び、たいへん議論好きで自分と信仰を共にするある人の家で働くことにしたのであります。彼がこれほどむずかしくない職業を試みたことがあったのも、むりのない話だと思います。なぜなら桶の側板というのはすぐにばらばらになるもので、中身を保存しておくような器を作るには、よほど手先が器用でなければならないからです。

より宗教的な教義上のことで導いてもらうために、彼はひとりの人物を見出しました。この人物は菜食主義を自分の信条としていたために、たえず動揺しながらも、文字どおりの意味で、肉の誘惑と戦っていたのでした。トルストイに紹介してもらうため、その男と屋敷へ向かう途中、ブーニンは彼の勝利と敗北をつぶさに観察することができました。男は鉄道駅のビュッフェをいくつか勝利のうちに通過したのですが、そのうちにとうとうミート・パイの誘惑に負けてしまったのです。この男はパイを食べ終わると、自分の個人的敗北をごまかすために、もっともらしい言い訳をいろいろと考えだしました。たとえば、「でもねえ、勝利したのはパイではなくて、自分だということが僕にはちゃんとわかってるんだ。僕はそんなものの奴隷じゃない。僕は自分が食べたいと思うときに食べるし、食べたくないときには食べないんだよ」などと言うのです。若い学生のブーニンがいつまでもこんな男の相手をしていることを望まなかったのは言うまでもありません。

トルストイ自身はブーニンの宗教的情熱をそれほど買ってはくれませんでした。「君は質素で勤勉な生活を送りたいと望んでいるのかね。それは殊勝なことだが、あまり、それに拘泥しないようにしたまえ。人はどんな生活を送ろうと、立派な人間になれるものだよ」そして、詩人という職業について語ったのです。「それは結構。そんなに好きだったら書いたらいいでしょう。でも、それが君の人生の目的ではありえない、ということをよく覚えておくんですね」だが、この忠告はブーニンにとってはむだでした。彼はすでに心底から詩人になりきっ

ていたからです。

厳格な古典的作品のモデルを踏襲した詩によって、ブーニンは急に人々の注目を浴びるようになりました。これらの詩のテーマは、しばしば、古い地主屋敷における昔の生活の美しさをメランコリックに描写したものでした。それと同時に、自分の印象を忠実に再現しようと、巧みにその能力を駆使しているうちに、散文詩の中で自然を印象どおり、豊かに、あますところなく描き出す力を伸ばしたのです。こうして彼は、自分と同時代の人々がシンボリズムとか、新自然主義、あるいはアダミズム、フトゥリズム、その他これに類する束の間の運動を唱道するさまざまな文学綱領をかかげて、一か八かの冒険に打ち込んでいるときに、偉大な写実主義作家の芸術的伝統を守りつづけたのです。そして極度に激しい変動の時代のなかで、孤立に甘んじたのでした。

ブーニンが四十歳になったとき、小説『村』(一九一〇)が彼を一躍有名にしてしまいました。そればかりか、激しい議論をまき起こして、悪評を買う結果にもなったのです。彼はロシア人の未来に対する信仰の本質、すなわち、高潔で有能な百姓たちによってロシアという国はいつか世界中をその陰でおおいつくすであろうというスラヴ主義の夢を攻撃したのでした。ブーニンはこのテーゼに対して、百姓たちの持ち合わせている美徳の実際の性格を客観的に描写して答えたのです。その結果、もともとそうした作品が稀ではないロシア文学においてすら、もっとも暗い残酷な作品の一つとなったのであります。

作者は、百姓たちの堕落については何の歴史的な説明も行なっていません。ただ、この小説の二人の主人公の祖父は、その主人がけしかけたボルゾイ犬によって故意に殺されてしまったことが、手短かに伝えられているだけですが、たしかに、この事実はしいたげられた人たちの精神がになわされた烙印というものをよくあらわしています。ブーニンは、どんなにぞっとするようなことを前にしてもひるむことなく、彼らの姿をありのままに示してみせました。彼にとって、自分のきびしい判断が正しいことを証明することぐらい、何の造作もないことだったのです。なにしろ、直後にひかえているもう一つの革命の前兆となった最初の革命のあと、残忍極まりない暴力の嵐が地方を吹き荒れたばかりでしたから。

ほかに適当な呼び名がないので、この本は翻訳では小説と呼ばれていますが、実際はこのジャンルとは似ても似つかぬものであります。それは下層階級の生活からとった無限に混乱したエピソードの連続からなっています。そこではディテールの真実性が作者にとってすべてを意味したのです。批評界はそうしたディテールそのものよりも、その冷淡な選択のしかたをただしたのでした。(もっとも、外国人にはこの批評の妥当性は判断できません)いま、この本はその後に起こったいろいろな出来事が原因となって、ふたたび強い関心を惹き起こし、ロシア人亡命者のみならず、本国にとどまっている人たちの目から見ても、古典的作品、堅実であり、濃密で、正確な芸術の模範となっています。

農村の描写は他の多くの短いエッセーのなかでも続けられましたが、これらのエッセーは、ときには、百姓を熱狂的、愛国的世代の目からみて約束の民にしたてあげたある宗教的要素を問題として取り上げたこともあります。作家の仮借ない分析によって、この世界における顕罪的性格をもった敬虔さは、無秩序な本能と自己卑下癖に帰せられてしまう。彼によると、この二つはロシア精神の本質的な特徴であると言います。もちろん、彼は青年時代のトルストイ信仰からはもう遠くへだたっていましたが、それからある一つのもの、すなわち、ロシアの地に対する愛情だけはずっと持ちつづけたのでした。彼がいくつかの小説のなかで描いたすばらしい田園風景は、かつてないほど見事なものでした。それはまるで、さんざん醜いものや偽りを見てきたあとで、もう一度、とにかく自由に息をするため、自分の身を守るためにやったかのようでした。

地主屋敷を描いた短編である『スホドール』(一九一一～一二)はまったく別の精神で書かれ、『村』とは好一対をなすものです。その本は、当時のことではなく、地主たちの全盛期を描いたもので、ブーニンの生家のある年老いた召使いの回想です。著者はこの本のなかでもやはり、オプティミストではありません。地主たちはほとんど生命力を持たず、自分自身のみならず目下の者たちの運命の責任すら持つにふさわしくないような人たちで、最もきびしい弾劾者たちが期待しそうな人間に描かれています。この本のなかには、ブーニンが『村』のなかで黙って見過ごした民衆弁護のための素材が数多く見出されます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com